

2022/8/28

ヨハネの黙示録 講解メッセージ㉓

『ヨハネの黙示録 10章 一イエス・キリストの登場一』

※ 永遠の契約

「また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。」（黙示録 10:1）

「強い御使い」とは、イエス・キリストです。たとえ苦しみの中にあっても、私たちを救うために一人一人のもとに神が来られるから、心配はいらないということを教えています。そのひな形として、イエス・キリストは実際にこの地上に来られたのです。「虹」は、神が人類に立てた永遠の契約を、太陽は神の愛、赦しを、そして、火の柱は、人を苦しめている罪を焼き尽くすことを、それぞれ象徴しています。神が立てた永遠の契約とは次の契約です。

「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」

（創世記 9:11）

これが、洪水のあとのノアに語られた永遠の契約です。つまり、「もう決して人をさばかない。救う。」ということです。

「さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を起こすとき、虹が雲の中に現れる。わたしは、わたしとあなたがたとの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い出すから、大水は、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水とは決してならない。虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」（創世記 9:12-16）

この永遠の契約のしるしが虹です。今私たちは聖書を通して神の思いを思い出すことができますが、当時は聖書がなかったので、自然を通して神の約束を思い起こすようにされていました。その後、神は永遠の契約がどのようなものなのかを少しづつ明らかにしておられます。神は、モーセに次のように語られました。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」（創世記 17:7-8）

「わたしは、彼らの神となる」とは、どういうことでしょうか。人は、死が入り込んだことによって神との結びつきを失い、死んだ状態になりました。ですから、神が人との関係を回復するということは、死人から生きる者にするということです。つまり、救いのことを語っておられるのであり、これが永遠の契約の第一の柱です。

第二の柱は、カナンの地を所有するということです。それは、神が私たちに貸し出したいのち（魂）を所有するようになることです。神は愛であり、愛が私たちの住む場所です。しかし、私たちはまだ全土を所有しきれていません。そこに住み、目の前に見えていても、人を愛せないし、神を愛せないのです。つまり、カナンの地を所有するとは、私たちの中から罪を取り除き、神を愛し、人を愛せるようにするということです。

ですから、永遠の契約とは、神との関係を回復して私たちを生きる者とし、神を愛し、人を愛せるようにするという契約です。この契約を携えてこの地上に来られたのが、イエス・キリストです。

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ 3:17）

そのイエス・キリストは、次のように語られました。これが永遠の契約の実行です。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

死人とは、私たちのことです。神は今、私たちに呼びかけ、その声を信じて従うなら、私たちは生きる者になるというのです。神の声を聞くとは、信じて従うことです。これを神の呼びかけに応答すると言います。神が差し出すプレゼントを受け取るならあなたは生きる者になる、これが、「あなたの神となる」ということで、神が永遠の契約の中で言わされた最初の柱です。

なぜ生きる者になれるのか、次のように書かれています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

神の呼びかけに応答した者は、永遠のいのちを持っていて、死からいのちに移っている、つまり、カナンの全土を所有しているのです。そのことがわかるように、神は私たちの中から罪を取り除かれます。私たちは良きものであり、義人です。今、この地上において、人を愛せない罪人の姿しか見えなくとも、自分が義人であることを信じられるように、神は助けてくださるのです。これが 2 番目の柱です。

イエス・キリストは永遠の契約を実行に移すためにこの地上に来られ、この永遠の契約に沿って、私たちの中から罪を取り除き、神と人を愛せるように導いてくださっているのです。

※ 理解できないほどの福音

「その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、獅子がほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのの声を出した。」（黙示録 10:2-3）

「開かれた小さな巻物」とは、救いのことばである聖書のことです。そして、人としてこの地上に来られたイエス・キリストは、救いが来たことを大声で叫ばれました。このことが象徴的に書かれています。

神の呼びかけには、二つのルートがあります。一つは、神から貸し出されたいのちによって、私たちの内側に語られる声です。そこには愛の全土があって、それを所有している私たちに神の声が語られます。もう一つは、聖書とイエス・キリストを通して、神は私たちの外側から呼びかけをなさいます。

なぜ、聖書の言葉が私たちの心に刺さるのか、それは、神が呼びかけていることを具体的に知るからです。聖書は今あなたに語りかけている神のことばです。そのことばを信じる時、私たちの中に神のことばが働くのです。

「七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた。」

(黙示録 10:4)

なぜ「神のことばを書き記すな」と言われたのでしょうか。

一つは、書いたところで人には理解できないから、と考えることができます。私たち人間は、神が言わることを 100% 理解することはできません。神のことばは、理解するものではなく、信じるしかないものです。

例えば、犬や猿などの賢い動物は、簡単なものなら人のことばを理解できますが、100% 理解することは不可能です。このように動物に制限がかかっているのと同様に、人には制限がかかっていて、人間は神について 100% 理解することはできません。神は私たちの想像を絶する方だからです。そのためイエス様は神の国のこと語るときには、たとえを使われました。つまり、私たちは神の前にへりくだるべき者であるということです。ただし、動物たちに私たちの愛情を伝えることができるのと同様に、私たちも神の愛を知ることはできます。イエス・キリストの愛を知るだけで十分なのです。

また、神は、信じるだけで救われると言われました。これは、この地上の常識ではとても納得できないものです。人は自分の努力で自分の価値を獲得しようとします。しかし、それが罪です。そこには神がいないからです。救いとは神が与えてくださる価値を贈り物として受け取ることです。自分で自分の価値を得ようとすると、人と競うことで自分の価値を獲得しようとします。それが戦争にも発展するのです。しかし、神は、あなたの価値は私があげるから、ただそれを受け取ればいいと言われます。そして、その価値をイエス様が十字架で示してくださったのです。これは、信じるしかないことです。イエス様が十字架で私たちへの愛を示してくださったのは、自分の努力で自分の価値を獲得する生き方はやめなさいということです。

「それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない。第

七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」（黙示録 10:5-7）

この御使いは、イエス・キリストです。「神の救いの預言が成就する時が、今来た」と宣言なさっています。「今が救いの時」（IIコリント 6:2）とありますが、このことを時間軸で考えるとよくわからなくなってしまいます。これは、神とあなたの接点は、常に「今」ということです。神がダニエルを通して語られた、次のような預言があります。

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」（ダニエル 7:13-14）

この「人の子」という表現は、イエス様がご自分を指すものとして、何度も引用なさっています。つまり、これは最も重要な預言です。ダニエルがこの預言の内容を確かめようとすると、次のように明かされました。

「彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。しかし、さばきが行われ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」（ダニエル 7:25-27）

つまり、人の子が来られて悪魔と激しく戦うが、最後にはさばきが実行されるということです。そして、神の国が実現し、私たちはそこに暮らすようになるということが語られているのです。

これが神の国の預言です。悪魔とは死です。つまり死が滅ぼされて私たちと神との関係が回復し、神の国のただ中に入れられる時が来るということです。その預言を携えて来られたイエス様は、次のように言われました。

「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。」（ルカ 16:16）

「預言はバプテスマのヨハネまでであって、すべての預言は成就した」ということです。「もはや時が延ばされることはない」と言われている通り、イエス・キリストによって預言は成就し、神の国の福音が宣べ伝えられました。ここで、「人々は無理にでも神の国に入ろうとしている」とは、律法の行いによって神の国に入ろうとしているということです。

「しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。」
(ルカ 16:17)

人々は自分の努力と行いによって、神に認めてもらおうとしましたが、それは不可能だと述べられています。世の中の宗教はすべて、自分の努力によって徳を積むことが正しいことであり、そうすれば救われると教えています。しかし、聖書の神は、それは不可能だと言っています。なぜなら、神の福音は愛だからです。人の努力ではなく、神があなたの価値をプレゼントするから、それを受け取るだけでよいのです。「なぜならあなたは私の作った作品だから」と神は言われます。これが救いです。

「それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」それで、私は御使いのところに行って、「その小さな巻き物を下さい」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」」（黙示録 10:8-9）

「イエス様から御言葉を受け取り、それを食べなさい。」と言われています。「それはあなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」とは、御言葉を食べると自分の罪に気づくようになるということです。神のことばは生きていますから、私たちの心を突き刺し、罪がわかるようになります。ですから、みことばを食べると心に痛みを感じます。しかし、同時に神のことばは「私はあなたの罪を赦した。私はあなたをさばかない。」と語りかけます。これは蜜のように甘いのです。自分の罪深さを知れば知るほど、その蜜は甘くなります。

神の恵みを受け取るためには、自分の限界に気づくしかありません。神は私たちに恵みを受け取らせるために、聖書によって私たちを罪の下に閉じ込め、神の約束を信じるように導き、救いを受け取れるようにしてくださいました。

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」

(ガラテヤ 3:22)

私たちは、自分の罪を知れば知るほど、神がそれを無条件に赦してくださるという愛に触れることができます。神のことばは私たちを罪に気づかせてくれます。そして、赦してくれます。こうして私たちは神の愛を知り、神に心を開くようになり、神を愛し人を愛するように変わっていくのです。これが苦しみの中における神の助けです。苦しみの中であっても「それでもあなたを愛しているよ」と伝えるためです。

「そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなつた。」(黙示録 10:10)

罪が赦されるという神の愛を知り、喜びに満たされて、それがずっと続くのかというと、そうではありません。しばらくすると、また自分の罪に気づくことになるのです。せっかく平安だったのに、また苦しみを覚えることがやってきます。そしてまた、神の愛に触れ、蜜を知ることになるということを繰り返します。

神との出会いは「今」であって、瞬間でしかありません。だから、通り過ぎたら、救われた喜びを忘れてしまうのです。そのため、喜びを持続するには、繰り返す必要があるのです。神に愛されていることを知っても、また罪が芽生えてくるのです。それは、自分の努力で自分の価値を獲得しようとする行動です。

そんなことを繰り返すなんて、自分はなんとダメなクリスチャンかと落ち込む必要はありません。そうなって当たり前なのです。なぜなら神はこの世界に生きておられるわけではないからです。神との出会いは瞬間瞬間です。神は動かないのに、私たちが動いてしまうのです。動きながら、渴くたびに神のいのちの水を飲むことを繰り返して生きるしかないのです。しかし、何度も神に赦しを乞い、何度も赦されることで、私たちは多く神を愛するようになっていきます。罪深い自分を知る者こそ、神を愛することができるようになるのです。

こうして私たちは神からいただいているカナンの全土を少しづつ取り戻していくのです。それは、私たちの中に愛が育っていくということです。

「そのとき、彼らは私に言った。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」」（黙示録 10:11）

「もう一度」というのは、一度きりではなく、何度でも語りに行きなさいということです。何度でも神の赦しを受け取り、神を愛する者となり、福音を伝えていくようにと語られています。

この世界は死の世界なので、常に私たちを否定し、滅びに導きます。否定的な思いを受け取ると、苦しくなります。苦しみを覚えるということは、神から目を離してしまったということです。これが罪です。ですから、私たちの苦しみは、すべて罪によるものです。罪を言い表すとは、その苦しみを神に訴えることです。そうすると、神は「大丈夫だ。私がなんとかするから。」と、あなたを励ましてくださいます。この地上で最初に罪を告白し、救いを受け取ったのは、アダムとエバです。アダムは「私は裸なので恐ろしくて隠れました」と、自分の苦しみを神に訴えたことによって救われ、皮の衣を着せていただいたのです。

苦しみを覚えたなら、神の前に言い表しましょう。それが罪の告白です。苦しみを覚えるのは、あなたの中に神のいのちが働いているからです。何度でも神の前に苦しみを告白し、助けを求めましょう。そうすれば、神は何度でもあなたを助け、あなたは何度でも立ち上がることができます。そして、何度でもやり直すことができるという、この福音を世界中に伝えましょう。

このような愛は人間には理解不能です。体験しなければわかりません。それで、書き残しても仕方がないと神は言われたわけです。もしあなたが今苦しみの中にあったとしても、この福音によって、希望をもって生きていきましょう。